

万事屋がマグノリアで  
出稼ぎするようです。

きつね うどん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

銀さんたちが滞納した家賃を払うためにマグノリアに来るはなし。

# 目次

プロローグ	1
1 話	4
2 話	8



## プロローグ

―数日前―

新「ちよつとお！銀さん！！家賃6ヶ月滞納しちやつてるんですよ！なんで呑気にイチゴ牛乳飲んでんですか！！給料だって出てないんですけど、僕んちの家計だってキツイんですよ！」

銀「ウルセエなメガネ、金はがつつく奴のところには入ってこないんだよ。そんなにキツイならさほら、腎臓って2つあるのなんか邪魔だし：：新「売らんぞ！！なに恐ろしいこと言ってるんだアンタ！！（っ・▽・）≡∩。▽。）：：：ドガツ ブベリアー！」

神「うるさいアル、小説始まって早々むさ苦しい男2人の会話なんて誰も望んでないアル。黙って私に喋らせるネ。これだから新一じゃなくて新八なんだヨ」

とまあ、僕らがいつものやり取りをしていた時、玄関のドアが開く音がし、万事屋の大家であるお登勢さんが入ってきた。

お「銀時いいいい！！アンタいつになったら家賃払うんだい？」

銀「ああもう！ねえって言ってるんだろ？うちは家賃を払わなくていいとしても火のタケコプターなんだよ！勘弁しろよまじで！！」

お「はあ、それなら仕方ないね。あんた達にはここから出てってもらう」

「「はあ」」

銀「どうゆうこったクソババア！俺はともかく、ガキどももいるんだぞ！金なし家なしでどうやって生きてくんだよ!!!」

お「まちな！ちゃんと話しをお聞き！私が言ってるのは出稼ぎしてこいつてことさね。あんたら3人は魔法が使えんだろ？」

銀「いや、まあ、そうだけど、魔法でどうすんだよ」

銀「今からマグノリアに行ってフェアリーテイル っていうギルドに入ってもらおう。そこで仕事して家賃を振り込みな！フェアリーテイル のマスターのマカロフには話をつけといたから。私の名前を言えばわかるだろ。宿もギルドの寮を使いな！あとは新八の魔法でさっさと稼いでこいやああ!!」バン！

銀「おい、ちよまてよ!...マジか...」

新「ちよつと銀さん!どうすんですか!」

銀「どうもこうも、行くしかねえだろ... って、おい神楽?」

神「銀ちゃん!マグノリアって?フェアリーテイル ってなにあるか?ギルドって??魔法使っているの?」( ( ( \* . ▽ . \* ) ( ( ) ) )

「「だめだこりゃ」」

銀「とりあえず荷物まとめるかあゝ新八、お前はお妙に伝えとけよこのこと、しばらく帰れねえだろうしな」

新「あ、はい……」

――数時間後――

「よし、んじや行くか!」「おうヨ!」「はい」

新「はい!えつと……ここですね。マグノリア…… 神「さつきと行くアル!!」

、」(ノ)、」(ノ)バシッ えっちよっ

シユン……

こうして、銀時達は江戸を去り、マグノリアへ向かったのだが……

「どこだどこだおおおおおおおお!!」

あたりはお登勢にもらった写真の街ではなく、岩だらけで草が全然生えてない荒原だった。

キ「ソウイエバ、江戸ツテ基本魔法ノ使用ヲ禁止サレテルケド久シブリニアンナ長距離移動シテ大丈夫デスカネ?」

お「まあ、あの3人ならなんとかなるだろ」

江戸にあるスナツクのつぶやきは万事屋3人には聞こえなかった。

## 1話

アイゼンヴァルトのエリゴールを倒し、クローバー大峡谷の大自然の迷宮の村での騒ぎの後ナツたちは村を出てまた、マグノリアに向けて歩いていった。

「「どいだい」おやおおおおおおおおお!!」

ナ「んあ? 誰か叫んでんぞ」

ハ「えっ? なにも聞こえないよナツ... あっ!」

人一倍耳のいいナツとハッピーたちが見つけたのは瞬間移動してきた万事屋だった。

新「あ、銀さん! あそこに人がいますよ!! 道聞きましよう?」

銀「そーだな、おいアンタらマグノリアって言う町どこにあるかしらねえか?」

ル「マグノリアに用があるの?」

エ「マグノリアなら私たちも今から帰るところだ。よければ一緒にどうだ?」

神「マジでか! ねえ銀ちゃんこの人たちフェアリーテイルの場所も知ってるんじゃないアルか? バーさんの地図には書いてなかったアル」

グ「ん? アンタらフェアリーテイルに用があるのか? 依頼か?」

神「違うアル! 私たちフェアリーテイルに出稼ぎに来たアル!!」

ナ「出稼ぎだあ？怪しいやつだな、ぶっ飛ばすぞゴラー！」

神楽の発言にナツが反応し、拳に火を灯した時：：

？「またんか!!」ナ「んえ？なんでだよじっちゃん！」

？「もしやお前たち、綾乃の紹介できた奴らか?？」

銀「はあ？綾乃?…いや待て、ああそつかあのバーさん綾乃だったな。マカロフッ

て言うじーさんに話し通せばいいって言われてんだけど」

ゴツツと銀時が神楽を小突きながら言った。

マ「わしがフェアリーテイルのマスター、マカロフじや、なるほどなお前たちが綾乃のこのガキどもか。自己紹介はまあ、ギルドに行きながらいいじやろう。

それより：：飯はないか?？」

ガクツツとそんな音が万事屋メンバーからしたのは聞き間違いではないだろう。

—————

ナ「ここがフェアリーテイルだ!!」

あの後お互いに軽く自己紹介をして、フェアリーテイルのギルドの位置をしつかり教えてもらい今度こそ瞬間移動でフェアリーテイルにつくことができた。ナツが誇らしそうに紹介すると先程からテンションが上がりっぱなしの神楽がくいついた。

神「おお、すげーアルな！ジーンさん！私たちが今日からここで働くあるか？人がいっぱ

いいるアル!!」

? 「あら、おかえりなさいマスター! そちらの方は?」

エ「ああミラか、では私から紹介しよう。彼らは江戸からフェアリーテイルに加入しに来た魔導師だ」

? 「あら! そうなの? 私はミラジェーンギルドの仕事の申請を受けてるから仕事したときはあそこのボードの紙をここに持って来てねちようだいね! それじゃあまずギルドの紋章つけましょうか」

ほほほん!

銀時は右胸に白色の、神楽は右腕に鮮やかな赤色、新八は首に水色と、様々な色の紋章をつけてもらった。

新「わー、みんなで色が違うんですね!」

ミ「そうなのよ、メガネ君。紋章の色は人それぞれの魔力に関わってくるのよ。気に入ってくれたかしら?」

グ「いい色じゃねーかメガネ君」

新「ちよつとグレイさん! メガネ君って!」

グ「じゃあ自己紹介すりゃいいじゃねえか。いいと思うけどなメガネ君」

ニヤニヤとこつちを見つめるグレイに新八は多少イラツとしたが無視してミラに自

己紹介をすることにした。

新「ええと、僕は志村新八つていいいます。人の目を通してものを見れるんです。あと脳つて目と直結してるので頑張れば思考とか過去にその人が見た記憶とかがみれますそれで、この眼鏡は魔法の暴走を抑えるためにつけてます。

あとは、座標とか、ちゃんとわかっている場所に瞬間移動出来ます!!あつちの銀髪の人  
が坂田銀時、オレンジ色の髪の子が神楽ちゃんつて言います。」

ミ「へえー、ところで、銀時と神楽の魔法は何なの?」

新「ええと...あれ?そういえば僕2人の魔法よく知らないな... 銀さんが魂をいじるとかで魔法を強化できて、神楽ちゃんが変身魔法だったつけ?」

銀「全然ちげーよ、神楽のは、魔法は絵本のキャラクターや図鑑の生物に変身できる

☒鳥獣戯画☒だろーが」

ナ「じゃあ銀時、お前のはなんなんだよ?」

銀「ああ?ああ、俺のは“滅鬼魔法”だ」

「「「「はあああああ?」」」」」

## 2話

銀「あん？ああ、俺のは滅鬼魔法だ」

「「「「はあああああ？」「」」」」

「何です（アル）かそれ？」

銀「あれ？俺オメーらに言っただけじゃなかったっけ？」

ル「滅鬼魔法ってまさか、ナツと同じ感じの？」

マ「スレイヤー系魔法、じゃろうな」

ナ「おまえは何の滅鬼魔法なんだ？」

銀「俺は幽鬼、さつき新八も言っただろ？魂の滅鬼魔法だよ。てかおまえもスレイ

ヤー系魔導師なのかよ…」

ナ「おう！俺は炎の滅竜魔導師だ！」

新「えつと… 銀さん？ちよつといいですか？滅竜とか滅鬼とかまるで竜と鬼を退治するくみみたいな名前ですけど… ほんとにいるんですか？」

ナ「ア”ア”？ふざけんなよメガネ！！イグニールはいた！」

銀「おいおい……落ち着けよナツ。」

ぱつつあん、竜も鬼もどっちもいるよ俺竜見たことあるし、鬼の方は実際に一緒に過  
ごしてたからな」

「「「「「?!」」」」」」

ナ「え!どこでだ!」

銀「ちよつと待てよナツ。見たのは俺がガキの頃だよ。喋ったこともねえし、最近全然見かけねえしな」

神「ドラゴンってどんな感じだったアルか?ドラオンボールみたいなやつアルか?」  
銀「いや、シエンオンとは違えんだよなーあんな長くねーし、手と足2本ずつあったし」

ミ「……?シエンオンってドラゴンはよくわからないけどドラゴンの資料ならうちに  
いっぱいあるわよ」

ナ「ああ!たまに調べる時に使う本か!とつて来る!」

神「ありがとネ、ナツ!」

しばらくするとナツがドラゴンの挿絵が着いている本を持ってきた

ナ「あつたぞー!!ほらこれ!!」

神「これがドラゴナルか……」キイイイイン

銀「?!おい、ちよつとまで! 神r                   バフっ!! バキヤ  
モクモク: : : 「あ、やべ」

煙が晴れ: : : そこに居たのは神楽だった:

「「「「「ええええええええええええええええええドラゴン  
?!???!」」」」」

銀「はあ: : .」

神「何よ銀ちゃん!! ちよつと変身しちゃっただけダロ!!」

ル「ほ、ほ、ホントにドラゴンになった: : .」

マ「ぎ、ギルドの屋根がああ」

神楽はギルドの屋根を突き破るほどの大きさのドラゴンになっていた

ナ「すっげえええ!! ホントにドラゴンだ!!! 火いとか吹けんのか??」

神「うん!! たぶんいけr 「「やめろおお(んかああ)!」」」

ナ「なんだよ! じっちゃん!!」

神「そーアルよ銀ちゃん! 新八!!」

銀「バツキヤロー!! てめえらギルド見てみる!! やるなら外でやれ!!」

神「えー           パフツ           あ!!」

ナ「うわ!!」

神「銀ちゃんがごちゃごちゃ言うから時間切れちゃったアル…」

銀「おい、俺のせいだよ…」

ナ「えー、もう終わりなのか」

銀「あーもう、今回のもまたいつでも変身出来んだろ？拗ねんなよ…」

ナ「え!!また出来んのか神楽!!」

神「うん…でも今日はやめとくネ、魔法久しぶりに使ったから魔力のコントロールが上手くないってないアル…」

ル（久しぶり？）「ねえ神楽、久しぶりってどういう…」

ナ「じゃあ仕方ねえな!!銀時!!次はお前だ！俺と勝負しろおおおお!!」ええ

?!ちよっナツ!!」

ナツ「くらえ!!火竜の咆哮おお!!!」

銀「おい、ナツまでまでええええ!!!」

ドガアアアアン  
!!!!!!